

---

# おいろなおし

臆病者

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

おいろなおし

### 【Nコード】

N27660

### 【作者名】

臆病者

### 【あらすじ】

地は苗床、水は癒し、火は暴力、風は気尽…その概念ってそういえば

どこから来たんだろう？光は正義、闇は破滅…ね、どうやらここは違うらしい。

そういえば、ここは何処なんだろう？

## 地の精霊の場合

「へえー、それはおもしろいわね。どうしてそこまで違うのやら？」

「さあ？わからない。けど、一般的な認識ではそうになっている」

目の前で笑っている人がいる。正確に言うなら人ではないが。

彼女は四元を司る地の精霊だ。

彼女は変化を求む。退屈を何より好まない人だ。

不変なんてと鼻で笑い、気紛れに地震を起こしたりする危ない人でもある。

「…なんか失礼な事を、今考えなかった？」

「明日は晴れるかどうか、考えていたよ」

「あらすう、…晴れになるんじゃないかしら。今日は良い天気。

ならきつと、明日も良い天気よ。」

彼女は直ぐに飽きるから、話を誤魔化し易い。単純な人だ。

「『地の精霊…揺るぎないもの。全てを育む苗床。生ある者が返る場所』ね、  
それじゃあ、あの子と話が合うでしょうよ」

「どうだろうね、同族嫌悪を惹き起こしそんな気もするけど」

「それもそうね。でも会ってみたいわ、あなたの言う『私』と」

「ここが何処だかわかれば、そして帰る方法があればね」

## 地の精霊の場合（後書き）

あまり、考え無しに書いてますので設定とかは適当です。  
感想頂けると、嬉しいです。叱咤激励お待ちしております。  
…まあ、これだけじゃ感想もへったくれも無いですが。

あなたはこの世界を…とかではないらしい

君は選ばれし勇者なんだ、特別な能力もあって…以下略  
やったー、元の世界にという流れではないらしい。

魔王ほにやらがとか、学園ハーレム！？とか、そういう雰囲気でもなさそうだ。

ええと、せめてこの状況に対しての説明が欲しいな。

なにしろ真っ暗闇に一人ぼっちだ。

どこ見ても暗闇で、平衡感覚が維持できず立つことすら出来ない。  
目を開けていても、はっきり言えば不快感しか浮かんでこない。

暗所恐怖症ではないが、かなりのストレスを感じる。  
自分から状況打破するのは難しいことを悟った。

目を閉じて体育座り…は疲れるので、猫のように丸くなって寝転んだ。

地面が硬くないので、苦痛は無い。

おやすみなさいと、一人呟いた。

「おやすみなさい」

誰からか返事が来た。飛び起きて辺りを見渡すが先程と変わりはない。  
い。

「この状況に対する説明が欲しい」

単刀直入に問う。

「彼女たちに聞くといい。今はおやすみ」

ふと思い出したのは、学校のとある先生。

あの先生も、眠気を誘う退屈な授業と、こんな穏やかな声だった。

その声に従ったわけではないが、どうやら体は眠かったらしい。  
そこから先の記憶が無い。そのまま寝てしまったからだ。

…大事な事を、聞き忘れた…彼女たちって、誰？

## 水の精霊の場合

「癒し、ね。くくく…あっはっはっはっは、ひー苦しい。

そりゃ、さぞかしあのモヤシとお似合いのカップルになりそうだ！アレだろ？こう美人で大和撫子で、常に夫を立てて三步下がって傍に控えてます的なイメージなんだろ…ぶふふあ…くくく…」

「…よく大和撫子なんて知っているね。それととっても汚い」

「悪い悪い。…ダメだ苦しいー、あっはっはっはっは…」

とうとう、愛用の槌を投げ出して地面をバンバン叩きだした。こっちに向かって噴出ささないで欲しい。

精霊だろうがなんだだろうが、唾を吹きかけられたら嫌だ。

「ほら、いつまでも馬鹿笑いでないで、日課の途中なんだろ？最後までちゃんとやれ、ついでにこんな物投げるな。」

「おっと、そういえばそうだ。ごめんな、あいつのせいなんだ。あいつが笑わせるから、つい耐え切れなくてお前から手が離れただけなんだ。

お前以上に俺をたぎらせる奴はいないからな。」

んーと、槌にキスする武器マニアを見て、深くため息をついた。

そして目の前にある氷の塊を見た。バトルジャンキーめ。

彼女は目立つ。見た目という点では他の精霊と比べれば目立たない。



地味だからだ。

でも目立つ。それは目がイっちゃっているからだ。

俺より強い奴に会いに行く、そういうタイプです。

毎日全開の力で、氷の塊を出し破壊するのが日課だ。

自分で出したんだからあっさり壊せそうだが、一旦自分から離れた力は

もはや別の物らしい。愉しそうにガンガンと叩いている。

これを見て癒されるのは、特殊な嗜好の方々のみだと信じたい。

## 水の精霊の場合（後書き）

地の精霊は、背の高い美人で機転も利くが飽きっぽいアホの子。  
水の精霊は、背は高くも低くもなくしかも美人ではないが、  
目がキラキラしてる子。

## 火の精霊の場合

「それは、興味深いですね。どうしてそこまで極端な差異が出るんでしょうか」

「さあね、わからない。でも一つだけ確かなことがある」

「なんですか？」

「お茶が旨い」

「それは…ありがとうございます」

「うん」

「ずー」。

茶葉の改良がまた上手くいったみたいだ。ようやるよ、本当に。

彼が司るものは火。見た目は残念なことにそうは見えないけど。モヤシとか、メガネとか、散々な言われようだし。

火の精霊のイメージって、ムキムキの魔人が色っぽい日焼け美人なだけだな。

さわやかに（言い換えれば気弱に）微笑んでいる彼の趣味は、植物の品種改良。

…生産的な趣味ではあるが、向き不向きで言えば向いてないよ…。だって、うっかり炭にしちゃうんだから。

その失敗を結構長い間引きずるからなー。前々回は酷かった。

とある精霊が暇つぶしに力を使った所為で、大地の力が急速に減少した。

そのとき（彼が言うには）最高の野菜ができていたとの事。

順調に育っていたのに、これはいけないと慌てて収穫しようとしたのがまずかった。

結果、慌てて収穫した野菜は力の制御不十分で触れた為炭化。

残っていた野菜も大地の力が枯渇し、普通栄養を貰う大地に逆に栄養を取られた為、

虫も食べないような、酷い物になったとの事。

…そのあとしばらく、メソメソ泣いていたのを励ますのは疲れました…。

「もっと、自分の力を前向きに使える趣味にしようよ（面倒だから）

…」

「こればかりは、趣味ですからね。やりがいもあるし止められませんよ」

なら泣くなど、声を大にして言いたい。まあ、

「美味しいお茶が飲めるからいいけどさ」

でもその、そうでしょうって顔で微笑まされると若干腹が立つ。

とある精霊よ出番だー、と心の中で思ったり思わなかったり。



## 風の精霊の場合

「私だけでも、真面目にお仕事しないと」

「真面目だなあ、長所でもあり短所でもあるってのは正にこのことだね」

なでなで。

「子供扱いしないで下さい！」

「ちがうよー。頭の位置がちょうど手の位置と同じなだけだよー」

「棒読みじゃないですか！」

「そんなことないよー」

ぷんすかぷん、と擬音が聞こえそうな膨れっ面である。

この精霊だけ、風の精霊のイメージと合致する点が多々ある。

幼い子供なのだ。けれどその肩には重責が掛かっている。

だからこそ、必死でもあり、他の事が一切見えていない。

先代に少しでも近づく為に、周りからの期待にこたえる為に。

他の三人もそれはよくわかっているからこそ、だらけるのだ。

実のところやるべきことはしっかりとやっているが、あえて彼女の為に

ほんの少しだけ、些細な事をミスするのだ。

そのミスに彼女が気付き、私が頑張らないと!…と意気込ませる仕組みである。

そもそも、先代の存在が大きすぎるのだ。

四元を統べる器はこれまでも何人もいたが、

それを成した者は彼だけだったのだから。

けれどそれは、やはりこの精霊と同じく本人が望んだものではなかった。

お人よしではあるが、一度決めたら決して引かない頑固者。

感傷に浸りつつ、頭をなでていたが反論が無い。

ぼそっと、小さな声でこう囁かれた。

「…ありがとう」

「どういたしまして」

「この件で、ちょっと悩んだの。でもおかげで気が楽になった。」

ん?どの件…どれどれ…。ああ、成る程。

「こつちでやっておくよ、無理だと思ったらちゃんと周りに相談すること」

「はい」

笑顔で手を振り彼女と別れた後、一人ため息。

あの馬鹿が、ちょっとじゃなくて思いつきり手を抜いたな。

こんな件はあの子供には早いだろうに。

後日、とある精霊が日課を自粛し書類と戦っていた。

「違うんだー、もう任せても大丈夫だと…」

「はい、口じゃなくて手を動かせー」

「いや、あの言わばこれは、そう愛の△…」

「ちほるな」

「…はい」

みんな過保護すぎるぜー、と思いつつ自分もその一員なのであまり強く言えないなと彼女は考えていた。



## 風の精霊の場合（後書き）

火の精霊は、モヤシでメガネ。物好きから見れば美形かな…？  
風の精霊は、身長は低い年齢は一緒。精神レベルが子供。並のか  
わいさ。

## 地の精霊の無茶

「勇者とか呼んだら、おもしろそうじゃない？」

「…ええと、聞きたい事が多数ある。1 魔王とか所謂、敵対勢力はどうするの？」

2 そもそも、ナニを勇者として呼ぶの？ 3 それって、誘拐じゃないの？

退屈凌ぎならもっとマシな事しろ馬鹿。 4 名前、はどうするの？」

「…さらつと毒吐くわね。大丈夫よ。敵は造るし、夢見がちで熱血漢で勘違いが

甚だしい少年に、女神として私がサポートに…」

「飽きたら、適当に結末を用意して記憶を消して、はいこれで終わりー…かな」

「そうよ」

「…」

「…」

「…それ、既に済みだよ。途中で投げ出して早送りエンドみたいなオチにしたの、忘れたの？」

「…」

「以前も言ったように、ここは通常の理とは違う。そこから慣らすのは時間が何よりいる。歪むし、最悪壊れるだけだよ」

「…あなたの世界のナニかを呼べるかと思って…」

「ふーん」

「あれ？感動のシーンじゃないの？涙の一つも見せてもいいんじゃないの？」

「ふーん、ってどういう事よ」

「『勇者』の必要はないし、そもそも覚えてなかったくせに取って付けた理由で

涙を流せと…。…ちよっと最近大地が荒れ気味だし、起きてても口クな事も言わないし、しないから一旦眠りにでもつく…。？」

「い・や・よ、仕事溜まっちゃうじゃない。アレ誰がするのよ？寝起きに

溜まった仕事見るのうんざりなんだから」

「…分かった、次回までにナニか用意しておくから。」

「ありがとう」

こっちが寝たいよ、本当に……。  
優秀な精霊過ぎると、何事にも飽きるのが早く、記憶力が無い。  
まあ、人間換算すればもう結構な年だから……。というのもあるが、  
興味失うとすぐ忘れるからな……。

「眼鏡には内緒よ、……うっとおしいから。」

眼鏡か……。そのカードを又使うかな……。、

はあ……。

ええと…ほったらかし、か。

あれから、どれだけの時間を寝ていたかはわからない。

なにせ、真つ暗闇で自身の感覚すら停止しているのだから。

感じるのは眠気と不快感だけ。それ以外一切の感覚が無いのだ。

極端に言えば、空腹や排泄といった一般的なものから、…試したくはなかったが痛覚等も無い。

時間の概念が維持出来ないのだ。

慢性的な眠気、自身以外何も無い空間に対する精神的な不安からくる不快感。

ただ、恐怖が一切ないことから、まだ発狂せずにはいられるが、それが救いと言えるかどうか。

もしかして…「死」の状態というのは、この事かもしれない。

そう考えると妥当な気もするが、それでも解決出来ない多々の諸問題も残る。

なんでこんな事をグダグダ考えているかと言えば、

最後に聞こえたあの声は、「彼女たちに聞くといい」とか何とか言  
つてたが…

一向に、状況に変化が無い…！

誰か来るとか！　なんか又声が聞こえるとか！　彼女たちって事は  
複数なんだとか！

そもそも何も起こらない！　なんだこの状況！　詰んでるよ！

アレか、今流行りのツンデレか！　早く誰でもいいからデレろ！  
いや出る、出てこい！

…ええと、だ、大丈夫。まだ発狂してない、はず、だと思っ、んだ  
けどな…。

この演技で、クスクス笑う声や、女性の声でも聞こえれば尻尾が揺めるのだが、

幻聴すら聞こえてこない。少なくとも意識はしっかりしている点と、この程度の茶番で

現状打破は困難という点は頭に入れておいたほうがよさそうだ。

仕方がない、か。

当てもなく、暗闇をフラフラ歩くしかないか…。

それがしたくないから、小芝居打ったのに…。

疲れも無いから肉体的な問題はないが、滑車のハムスターを連想してしまい、

精神的には萎える。

…この落とし前は、高くつけないければ気が済まない。

只々、その後も歩き続ける事が、恐らく無為な事くらい、ある程度は予測していたんだけどね…。



## 水の精霊の馬鹿

「あれだ、敵とか造ればいいんじゃないかねえか？」

「それは、そっちが欲しいだけだろうに。…言つとは思ってたけど鈍器が、まるで羽の様に軽々と振り上げられ、そして躊躇いなく振り下ろされる。」

鍛冶場で響くような、ある種のリズムをもってその音は続く。

異なる点があるとすれば、ハンマーではなく槌が、鉄ではなく氷に振り下ろされている事だろう。

「結構悪くないアイデアだと思うけどな。お互いに切磋琢磨しあう事は素晴らしいじゃないかねえか」

「…それって、普通にライバルでいいんじゃないの？」

一定の音に、彼女の高らかな笑い声加わる。そして、

「敵なら寝首をかく、つつ楽しみ方もあるじゃねえか」

「仮にも精霊の言う事か」

斜め45度のチョップをかます。あいたー、って、嘘をつけコイツ…。

「まあ、さっきのは置いといて、丁度良かったかな。試したい事があつてな」

「置いとく、じゃなくて、そこは『冗談はさておき』だろうに」

「まあまあ、堅い事は言いなさんなや。力になれるかもしれないんだからよ」

「あんまり、聞きたくないな。これ以上面倒が増えるだけな気がする」

「待てよ、一石二鳥もしくはそれ以上の結果が出るかもしれない話だ」

「ふーん」

「…」

「…」

「なんて冷たいの、あたし悲しいわ…。あなたにつれなくされると、涙が出ちゃう」

「御免、気持ち悪い。鳥肌が立った。さあ、さっさと話して下さい…」

「そうそう、茶々ばかり入れずに素直に聞きな…と、その前に…」

「ん？」

「巨人と、ゴーレムならどっちが強いと思う？」

「…」

「あいたー、いやいやお前の話に関係あるんだってば」

「…言ってみる、聞くだけ聞いてやる。」

「あいつの敵件、俺の敵を造ろうかと思うんだがどうせなら強敵がいい。フロストジャイアントかアイスゴーレムでも造った後、残りの奴らにも協力させて四元の力で”自我”を入れようと思う。」

「そうすれば、敵でもあり、新たな精霊の誕生にもなるじゃねえか。モヤシの説得はお前に任せるが、あのチビは、きつと仲間が増えれば喜ぶぜ。な、いいアイデアだろ？」

「… …そうだね、アイデアは悪くない」

「だろ？そうと決まれば善は急げだ、モヤシ騙くらかして、どっち

か造るか！」

「………どうせなら、両方造ろうか。その方がおもしろいだろ  
うし」

「お、なんだよ、珍しく乗り気じゃねえか。てっきり又チョップ飛  
んでくるかと思っただぜ。なら、あいつん所にも行ってくるからな  
」

言つと同時に姿が消える。精霊に距離は意味を為さない。

…危険な賭けだが、見返りは大きい。ほんの少しだけ、布石を敷く  
のも悪くはないか…。

その後紆余曲折経て、フロストジャイアントとアイスゴーレムは”  
自我”持つ物として造られたが、”自我”を造る際に水の精霊は、  
基盤を自身の力で作成した事もあり、自我製造過程での協力を失念  
そもそも、彼女から一旦離れきってしまった力はもはや別の力の為  
彼女が当初思い描いていた結果とは…大幅にズレが生じていた。

結果：とってもお淑やかなフロストジャイアント（見た目は山岳民・  
愛称フロス）

引っ込み思案なアイスゴーレム（見た目は雪女・愛称アイス）

上記の美人姉妹が生まれたそうなの…。二人は仲好く暮らしたのかなとか…。

敵？…えーとなんの話だったけな…？

P'S あれ、こんなはずでは…とか、言いながらその後氷を槌で殴り続ける馬鹿が居たとか、…居ない事に、出来ないかな…。  
ああ、もう…。

…予想通り失敗して、よかった。これで、当分はまだ、凌げるだろう…。



## 水の精霊の馬鹿（後書き）

フロスは所謂、ゲームで言うメインヒロイン的なイメージ。  
アイスは、主人公の妹もしくは幼馴染的なイメージ。

気分屋は、一般クラスメート。馬鹿は、フラグ立たないイロモノ。  
眼鏡は、浪人生。チビは、モブ。そんなイメージ。

全体的に、残念な精霊達…。

上記二人はこれからも、ドンドン活躍する…予定。

## 火の精霊の心配

「ハアハア、あんな奴らと違って…フロスちゃん、アイスちゃん可愛いよ…。ああ、二人に色々と、手取り足取り教えて上げねば！そう、色々と…。ウへへへへ…。ウ、ウへへへへ…。」

とか考えているんでしょ？この色魔め」

「…あなたは人の事を、何だと思っているのですか！そんな訳ないでしょう！」

「人じゃないけどね」

「…」

「…」

「ひ、人じゃなくても倫理観や道德観と言ったものだってあります！そもそも僕の力の一部がある時点で、娘みたいなもの…」

「うわー、あれか。こう『お父様』とか言わせて、アレコレ調教とか緊縛とかそつち系か、この鬼畜眼鏡。趣味は選んだ方がいいよ…捕まりたくは無いですように…」



「そんな趣味はありませんし、捕まるような事をした事ありません。それに、誰が僕を捕まえるんですか！」

「えっ」

「えっ？ ……！ 『えっ』て！ ……うっ…」

泣いた。

…偶にね、泣かしたくなる。好きな子を虐めちゃう理論ではなく、

単なるSなんだろうな…。

今日も、お茶がおいしい。BGMも今の気分ぴったりだ！

…はあ…。

「うっ…、…？ど、どうしたんですか、ため息なんかついて」

「いいから、涙と鼻水を拭け。汚いから」

ちーん、って子供かお前は。

「…あなたの機嫌が悪い時は、大抵何か厄介事がある時。僕ではお力になれませんか」

「んー、もう実は助けて貰った後かな。うまく転べば、だけどね」

「道理で。…いつもなら一蹴しているような気まぐれを、よく了承したなと思いましたが…」

「あの暇人2名は置いて、あの子は喜ぶだろうしね。…それに間違いであつたらいいけど、黒猫が近々迷い込んで来るかもしれない。嫌な予感がする」

「…」

「まあ、そんな気がするだけだから」

「…」

「だからちょっと、あの熱血漢と根暗に会ってくる。…憂鬱だ…」

「…えーと、あなたが手ぶらで行ったら話がややこしくなりそうな気がするので、この茶葉とこのお茶づけでも持って行って下さい」

「ありがとう」

「…間違っても、あの方々の前で暴言吐かないで下さいよ…。畑に影響が出そうなんですから」

「えっ、畑の心配？」

「はい」

即答か。…フロスとアイスには、ある事ない事言いふらしてやる「の鬼畜眼鏡…」。

「ずずー」。

ああ、今日もお茶がおいしい。

平和な時間は、有限だ。今はつかの間の休息を味あわねば。

…しかし、もう一回くらいこ奴を泣かせたいという邪悪な思いが…。

## 風の精霊の野望

「うふふ…、うふふふ…」

「…ええと、どうしたの？正直さつきから笑いつぱなしで怖い…」

「だって、私がお姉ちゃんになったんだから！」

「？」

「アイスとフロスの事。私の方が年上なの、だから私がお姉ちゃん！」

「…：…見た目だけで言うなら、フロスは明らかに年齢上に見えるし、アイスはどっこいかな。精神年齢は明らかに他3人に近いフロスと、…私見交えなくてもアイスの方が成熟してそうだ…。そんな事言えないが。」

「今まで、一番子供扱いされていたけど、これからは違うのよ。私が二人を可愛がるの」

「そうだねー」

「二人にお姉ちゃんって呼んで貰うんだー！」

「ソウダネー」

「うんー！」

…棒読みに気付かない程興奮している。よっぽどうれしいんだろうな。微笑ましいなあ…。

「この後一緒にお茶しようって、約束してるから一緒に行こうよ」

「いいよ」

なんとなく、この後の流れが読めるけどね…。

雪のかまくら…ではなく極々普通のごじんまりとした一軒家。そこに二人は住んでいる。彼女達はそれこそ、元々の生成過程から考慮すれば姉妹と言うより片割れ同士がニュアンス的に近い。基本が巨人かゴーレムか、それだけ異なるだけなのだ。

「ようこそいらっしゃいました、歓迎致しますわ」

「…」

「駄目よ、アイス。後ろに隠れていないで挨拶しないと」

「…こんにちは」

「こんにちは！」

「こんにちはー、はいこれ茶葉とお茶つけ。あの眼鏡生產品だからおいしいよ」

「まあ、うれしい。早速頂きましょうか」

フロスがお茶の準備に行く際、ついで行きそびれたアイスに向かつてうれしそうに

「私の事はお姉ちゃんって呼んでいいからね！」

言ったー…。

「…」

表情の起伏があんまりないけど、…困ってるように見える。結果出た言葉は…ぷふ…。

「…お母さん？」

「おか…！」

地に伏す風の精霊と、笑いを堪える為に変な顔になってしまった客人を見て、途中経過を知らないフロスは一体何が起こったのか直ぐには分からなかった。

「…お姉ちゃんですか、ま、まあ確かにそうですね…」

「そう！私が二人のお姉ちゃんなんだから何かあれば頼ってね！」

「…お母さんは、駄目なの？」

「うくく…、苦しい…」

「笑うなー！…お母さんはちょっと違うんだよ。お姉ちゃんなの！」

アイスがフロスに向かって、どうしたらいいのって目配せ。察してあげなさいと言わんばかりの返答。うーん、まさに姉妹ってこっちの方がそれらしい…。

「…お姉ちゃん」

「そう、お姉ちゃん！決してお母さんじゃないからね」

「お姉ちゃん」

「うんー！」



「微笑ましいなあ……」

「ですね……」

「まあ、二人は置いていて。暮らしはどう？もう……色々慣れた？」

「はい、いつも皆さんによくして貰ってます」

「退屈凌ぎにからかわれたり、なんか戦闘に関する事仕込まれそうになったりしてない？」

「まあ、程々に」

ふふ……と優雅に笑う。

アレ？

意外とおっかないかも

しれない……。

「未だにアイスは、……あなたを見ると後ろに隠れてしまいますね」

「……それはしょうがない、アイスの方が感受性高いからね」

「今ここでこうして幸せなのを、目一杯受け入れています」

「……」

「だから、それがずっと続くといい。贅沢ですね、何よりの我儘です」

「それは……」

「フロスも私の事、お姉ちゃんって呼んでいいんだよ！」

「あらあら」

話を遮るように、小さな背を伸ばしてのたまう。…さっきまであっちにいたのに。

その後もなんやかんやで、のらりくらりお姉ちゃんとは決して呼ばないフロスであった…。

「また来るから、その時はフロスにもお姉ちゃんって呼んで貰うからね！」

「また、楽しいお茶にしましょうね」

「それじゃ、また頃合い見て様子見に来るよ」

「…さようなら」

「お姉ちゃん」 「なあに？」 「アレ…？何？…怖い」 「可愛  
いじゃないの」 「そっぢじゃない」  
「…分からない、でもアイス、あなたに害為す事はないから安心し  
て」 「はい」

そう、害為す存在では無い。少なくとも私達の生みの親と言っても  
過言ではない。

でも、…確かに一抹の不安がしこりの様に心に染みている。

穩やかだけれど、時は過ぎる。どう転ぶか、書の内容は読めない。

## 風の精霊の野望（後書き）

アレ？風の精霊、完全に蚊帳の外だった…。

タイトル貰っても主役を張れない子が頑張ったけど、前回に続いて  
おいしいところ持って行かれてる…。

## 光の精霊の怠慢

「…なんで今度はモグラなの…？」

「え、…暗いところって落ち着くじゃないか」

「…」

「…」

「仮にも光の精霊の言う台詞じゃないよね」

「…別に自ら望んで、そう呼ばれるようになった訳じゃないしね」

こいつ…。

この間は畑に力を貸して欲しいって言われて、てっきり太陽の光で協力するのかと思ったら、ミミズになってきた事があった。（見たくはないが）実物より巨大な姿で協力するならまだしも、変哲もないミミズ一匹が畑の土壌にどれだけ影響与えると思ってるんだか。

「でも、考えてみなよ。巨大なミミズが土を排泄処理して土壌改善するんだよ？ホラー話にしかないよ」

「人の心を読むんじゃない」

この根暗な奴が、光の精霊。彼は常に何か他の生き物の姿をしている。…大抵夜行性だったり、今回の様にむしろ光を苦手とする生き物の姿を。

「…まあ、いいや。お茶淹れる」

「いいよ、要らない。…君の淹れるお茶は熱くて飲めないよ」

「？ 自分の分しか淹れないよ？」

「ええー…、どうせなら一緒に淹れてよ、温めでね」

「嫌だ」

「ええー…」

「ポコポコポコポ…」

ふう、お茶がうまい。なんか言いたげな目でジトーと見てるが気にしない。

「…ケチ、ドケチ、貧乏性、甲斐性無し、不細工、チビ、デブ、ハゲ…」

「なんか言っただか、この野郎」

「…いいや、何も…」

しょうがない、もう。

「…熱いよ、もっと温くし…、何でもないです」

「よろしい」

横暴だ、我儘だ何だとグチグチ聞こえるが、淹れて貰って文句を言うな。

どうせ自分じゃお茶も淹れられないんだから、この駄目精霊め。

「…違うよ、疲れているんだよ。人間は自分勝手に『もつと光を』なんて言うけど、それがどれだけ大変な事か分かつちやいないんだから」

「他の精霊だって、同条件で力の行使してるけど」

「…」

「…」

「…どうしてあんなに真面目に働けるんだろうね、不思議だ…」

「こつちとしては、どうしてもそこまで人間臭い言い訳出来るか不思議だよ…」

「どうせまともに働いたって、働かなくなつてさして差は出な…、」



冗談だから目にペンライトの光は止めてー…、目が、目がー…」

ふう、すっかりした。

「ドS…、あ、いや何でもないです、はい。ほ、本当に冗談だ、ギ  
ヤーー！」

「から出したの？」  
「…、ちなみに…ペンライトはどっ

「ん？きつと、どんな姿になってもこれが効くだろうと」

「…（鬼、悪魔）…」

「考えるだけにしときなね、…もう一回されたくなければ」

「人の心を…」

「読めるわ、馬鹿め」

「すずー…。」

「さて、それはさておき。この間、わざと手を抜いただろ？」

「？ … ああ、当たり前だろ。あんな事に協力出来る訳ないじゃないか」

「よくやった。…それでいい」

「????？」

まだ時期早々なのだ。こいつが本気を出していたら、少々まずかった。

「そろそろ、黒猫が来る。精々準備しといた方がいい」

「…大丈夫だよ、アレが張り切って歓迎するに違いないから。…や

「だなぁ、又仕事増えるのかー…」

「まあね。そういえば、フロスとアイスには会いに行った？」

「…挨拶だけは」

「どうせそっぽ向いて、ボソボソとよろしくです、とか言ってきただけなんだろう？」

「エスパーム…」

「分かるわー、そんな事！」

## 闇の精霊の歓迎

「これとこれなら、どっちがいいと思う?」

「……」

「スタンダードなのに、よく見ると細部にまでこだわったこの黒の刺繍。それも徐々に色の濃紺をずらしていく事が出る艶やかな見た目。かたや、こちらは古いイメージに囚われない斬新なフォルム。色合いもさつきと違って見目麗しく、かつ下品にならないように配置には苦労した。…どっちがいいかな?」

「…どっちでもい」「どっちがいいかな?」「どっちで…」「どっちの方が映えるかな?」

うぜー!どっちでもいいんじゃない!どっちだって素人目からすれば『凄い』の

一言じゃー!

だけど、ここまで言われるとさっ気が疼く。ここはもちろん…!

「両方、嫌だ」

「そんな事もあるつかとこれ」

…なん…だと…、第三の衣装もあるのかい…。

何だかもう一つの衣装について熱く語り始めたから、これ以降は聞き流す。

彼の生き甲斐は裁縫だ。アイデアが頭をよぎるとそれを如何に形にするかで

一杯になる。

…でも、そう言えば他の奴らも人の話を聞かない奴の方が多いな…。

ま、まあ置いといて。

闇の精霊たる彼は、悪魔の様な外見をしている。角は生えているし羽は生えているし…。

ある意味一番『らしい』精霊とも言える。…性格以外は。

うん、とっても良い奴なんだよ。

…ちよつーと凝り症で、お節介が過ぎて、涙もろくて、…うつとおしくて…。

ここに来て思ったのは、家庭的な男の精霊（モグラは声でオスだと思いが除外）と

活発的な女の精霊しか居ないんだな…と。

ちなみにいつぞやの暇人の悪ふざけで召喚された勇者が、当初倒すラスボス役を任せられ嬉々としてそれらしいドロドロギラギラした『ザ・魔王』的な服も縫ったのに、早送りエンドの都合上出演すら無かった為、今も尚こいつの箆笥の中にはかさ張る魔王服が鎮座している。

いやー、冗談のつもりで皆で一度着回してみたら、縫った本人が一番似合わないっていうね…。誰が一番さまになったかは推して知るべし。

ぶつちやけると、童顔で結婚詐欺にホイホイ引っかかりそうな甘ちゃんなのである。

良い奴ではあるんだよ、…ただ、性格の不一致で疲れるんだよ…。

「…で、どれがいいかな」

「…ちなみに何時着る用の衣装なの？普段は一枚布巻きつけてるだけのくせに…」

「決まってるじゃないか、黒猫さんの歓迎の為さ。きつと黒猫さんも君と同じで僕らを見て吃驚するだろうしね。どうせなら最初に来るだけインパクトを与えて、それから徐々にここに慣れてもらうかと。」

「…うん、違う意味で色々吃驚だろうよ…」

「君もその為に、あんな賭けに出たんだろう？でも、残念だったね。賭けは負けてるよ」

「…！」

「だから、盛大に歓迎しようじゃないか。滅多にないお祭りにしよう！」

「… ……」

あーでもない、こーでもないと言いながら、何時の間にか他の精霊用に色違いの衣装を縫っている。  
とつても頭が痛いな、これは…。

「料理は君が用意するんだからね、『今は』君が一番得意なんだから」

うう、頭痛いよー…。こんなコンボが来るなんて…。

「で、君の着る衣装はこれだからね」

「… ……いやだー！ 絶対に、いやじゃー！！！！ こんなの着るか！！！！」

あ、頭が痛いよう…（涙）

黒猫に、どんな姿で映るのやら…。黒猫が、どんな姿で映るのやら…。



## 闇の精霊の歓迎（後書き）

モグラはニート。声は籠ってて聞き取りづらい。仕事はお尻を叩かれないとしない。

童顔は、古いタイプのRPG勇者。但しいケメンでは無い。眼鏡とキャラは多少被るが、あっちは言わば僧侶に近い。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2766o/>

---

おいろなおし

2011年10月28日01時13分発行